

衛門は若名を新藏と云ひ、坂部市郎右衛門は權八とて、長久寺にて手習し、十九・廿歳にて前髪取り、其の翌年の事也。惣構の河岸端、其の時分迄町屋也。鞘師徳兵衛と云ふはおんど取の大名也。此の者の所へ鞘を頼みに兩人参り、歸りけるをりふしなり。何れも若者どもとをしまぬ人はなかりけり。とあり。按ずるに、高島定延の菅君雜録には、寛永六年己巳に係けたり。三壺記と一年の違ひあれど、三壺記に其年御即位有つて寛永の御門と申奉ると見ゆ、紹運録に、明正院寛永六年十一月八日受禪、同七年九月十二日即位とあれば、彼の喧嘩も寛永七年庚午六月の事なるを、誤つて六年己巳に係けたるなるべし。菅家見聞集等にも、即ち七年の事とす。さて鬼川の橋といふは、長町四番丁の橋なるべく、今いふ鬼川橋は木倉町の橋をいへるなり。

○石浦山王舊社地

長町三番丁入口北側なる舊藩士淺加氏の邸、暨び其の向なる由比氏の邸地は、往昔一區域の地にて、石浦山王の舊社地なりと云傳へたり。淺加氏の邸内に、社跡とて小高き岡

上に雜木生茂り、雜木の中にたもの木あり。是は神木也といへり。若し此の木に指障る事などあれば、必ず祟ありとて、淺加氏の時より甚だ恐怖したりとぞ。今葛卷氏爰に居住し、神木とて今に至り崇敬すといへり。按ずるに、金澤事蹟必録に、今の安房殿町より石浦町・長町へかけて法船寺馬場邊まで、昔の石浦村の地也。とあり。されば昔石浦町に石浦の村落ありし頃は、此の長町三番丁の地、村落の近地にて、爰に社殿ありし事さもあるべし。石浦社藏慶長十一年石浦郷七ヶ村氏子連名訴狀を考ふるに、天正八年三月柴田勝家等加賀の賊徒追討として討入り、閏三月九日尾山城を攻落しける時、石浦の社殿及び本地觀音堂兵火に罹りける處、慶長七年三月廿九日石浦山王遷宮の事を記載せり。されば天正八年までは、此の長町なる舊社地に社殿ありしかど、兵火に罹り、慶長七年再興の頃は、此の地邊既に武士の邸地と成り、且石浦の村跡も、石浦町とて町地に成るに依りて、石浦村を今云ふ本多町の地に再興せしなるべし。さて此の長町三番町を初め此の地邊は、中頃より野町神明の氏子と成りたれど、淺加氏、由比氏は後々まで石浦

山王を産土神と崇め、例祭等の節献供する舊例也。是も往古の社地なるゆゑなりと云傳へたり。延寶の金澤圖に、舊社地址は淺加左平太、其の向を板坂孫三郎・川勝五郎兵衛とあり。後に板坂・川勝移轉して、跡地をば由比氏の邸地と成したるなり。

○淺加九之丞邸跡

延寶の金澤圖に、淺加左平太とありて、三番丁の北側なる入口なり。元祿六年の土帳に、淺加左平太長町山本千丞小路とあり。左平太は九之丞の父也。享保九年の土帳に、淺加九之丞長町とありて、是より歴代此の邸に居住せしかど、明治廢藩の際退去せり。

○淺加九之丞久敬傳

燕臺風雅に云ふ。淺加久敬字通卿。通名九之丞。號山井。取淺香山之古國風。天質雅致。麴尾花月。而口不言財。擗管能國朝麗藻。又讀國史。而精古今掌故。嗜好僧兼好徒然卿。病其語氣隱願難通曉。諸註亦從傳。紕繆。稽之和漢群書。彈其精竭慮。於其義之所窒礙。於其註之所虧缺。補之。鉛槧經幾瑩雪。羽翼始整。顏之諸抄大成二十卷。貞享五年

付割剛氏。缺成進公電。公一覽曰。精則精矣。然一片婆心那足裨益道義。兼好土梗之學。緣飾儒釋道之一班已。況此書非全出兼好之手。今川了俊編次者也。惜不盡力聖典。擅辜梨棗。久敬慚悚汗栗而退。凡久敬所纂。謹記漫錄數十卷。今猶好事家傳寫。爲塵譚益挈之一助。と按ずるに、九丞久敬は、其の祖左馬助三卿の曾孫也。三卿は奥州安積郡安積城を預り、安積を稱號とす。故に彼の安積山の古歌に據つて山井と號す。その著書は、徒然草諸抄大成のみならず。十要拔書・列國雜記・四不語錄・都の手ぶり・北陸道程記等なり。右十要拔書は、寛文六年四月より寶永六年十一月まで、凡四十二年間藩政の諸事を編年輯成す。今俗間の年譜は、多分此の記に據つて編纂せしにやといへり。列國雜記は諸國の聞書なり。四不語錄は一名吼噓物語と云ふ。古今著聞集・宇治拾遺・吉野拾遺、其の外大和怪異記・本朝怪語・古事礦石集・新語園・因果物語・故事因緣集・辟玉話などの諸記録に載せたる怪談奇事共を擧げ、或は近世の金澤および加越能三州の奇事怪異共をも記載し、左註に古今の書籍を引證して論辨せり。自序に云ふ。或人難じて曰く、昔文宣王は